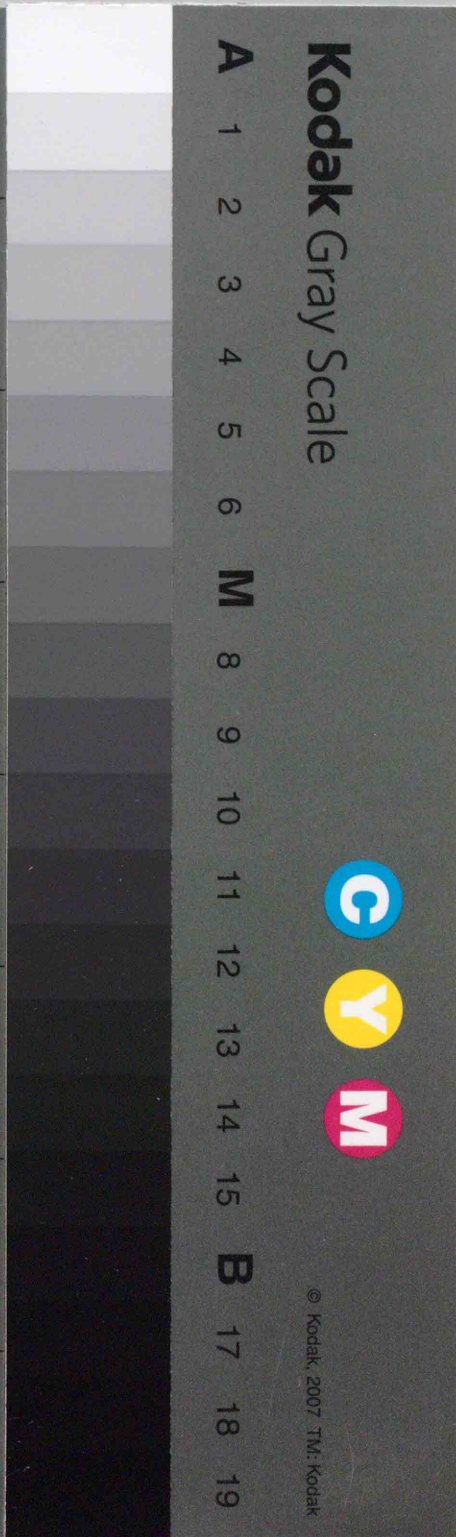
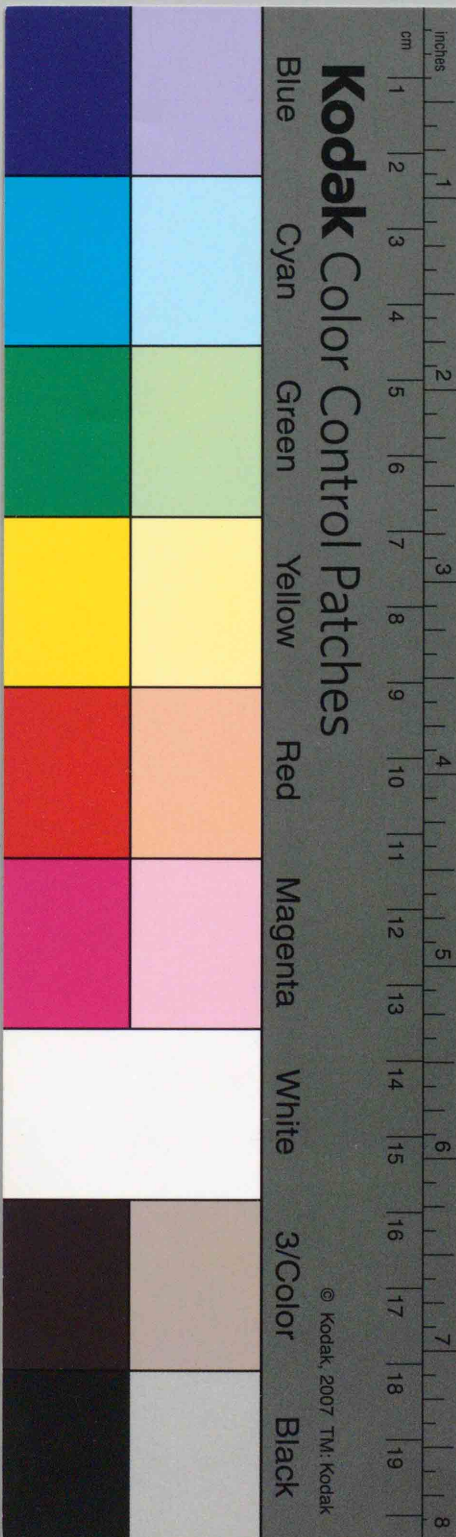


新體
日本文學史教科書

文部省檢定濟
藤岡作太郎著
全

4a
810
PA37



42034

教科書文庫

4
810
41-1904
20000 66979

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

42
810
明37

資料室

文部省檢定濟

東京帝國大學
文科大學助教授

文學博士藤岡作太郎著



新體 日本文學史教科書

東京 開成館藏版

凡例

- 一 この書は中學校、高等女學校、師範學校等の日本文學史の教科書にとてかきたるものにして、嘗て刊行したる日本文學史教科書をもととして、訂正を加へ、體裁を改めたるものなり。
- 一 從來、日本文學史の教授が、とかく時代思想の變遷を疎かにし、書籍の解題と著者の傳記とのみに終りやすきを以て、さきの原本は力めてこの弊を矯正せんとしたりといへども、一時の急激なる變動を恐れて、多少、在來の面目を存せしめたりき。されど時勢は日々に發展して止まらず、今や世間はますます進歩したる文學史を要求するに至れるが故に、これに應せんがため、この書の改訂は成れるなり。
- 一 されば本書は文學の大體の變遷を旨として、その他のことは概ね略して記さず。教授の餘暇だにあらば、文學者の傳記、逸話等をも併せ説きて、なるべく興味を添へられんことを、教師諸君に希ふ。
- 一 太古より現今までを五大期に別ちて、まづ各期の特性を通説し、明治の世の

凡例

外は、更に年歴の前後によりて、各期を四小期に割きて、その文學の一斑を説く。明治の世は、年を経ること久しからざれば、大體を通説するに止めたり。

一 時代の分割は、なるべく大數をあげて、十以下の數を省けり。時代の名目によつて來るところの事實と、その年に多少の出入ありといへども、文學史としては不都合もなく、却つて記憶に便なるべしと思へばなり。但しその大數に過ぎざること、豫め注意せざるべからず。

一 引例は力めて省略し、僅かに必要な數項を存したるが、文學的價値を主とすれば、作者の特色を没するものあり、特色を取れば、價値の少きものあり、兩者並び存するもののみは得難ければ、中には本文に説くところと、引例と、相合はざるが如きものなきにもあらざるべし。時には他の例をも舉げ示して、生徒をして疑團なからしめられんこと、編者が特に教師諸君に望むところなり。

明治三十七年六月

編者

目次

總論

第一章 太古

- 一 神代以來……………三
- 二 漢學公行以來……………八
- 三 佛教傳播以來……………九
- 四 奈良朝……………一一

第二章 平安朝

- 一 弘仁時代……………二三
- 二 延喜天曆時代……………二九
- 三 藤原氏全盛時代……………三四
- 四 院政時代……………四二

第三章 鎌倉室町幕府の世……………四七

一 鎌倉時代……………四九

二 南北朝……………五六

三 室町時代……………五九

四 戦國時代……………六四

第四章 江戸幕府の世……………六六

一 寛永時代……………七〇

二 元祿時代……………七四

三 寶曆前後……………八五

四 文化文政時代……………八九

第五章 明治の世……………一〇〇

新日本文學史教科書

藤岡作太郎 著

總論

文學とは何ぞ 文學は人の思想感情を文字に現はせるものにして、進んでは人生の秘奥を開き、造化の妙理を窺ふに至るなり。

一國の文學史 一國には、必ずその國民に固有なる思想感情具はり、その國の文學はよくこの特質を發揮す。なほ一時代にはその時代の特質あり、文學者には個人の特質あり。一國の文學史は、これらを擧げて説明批評し、その變遷の由來を究む。

日本文學史 されば日本文學史は、わが國民に固有なる思想感情が、各時代に於いていかに轉化し、諸大家によつていかに異同ある

かを究むるものなり。而してこれらの變遷は、内政の治亂等種々の影響を受くといへども、殊にわが文學に對する感化の強かりしは、儒教と佛教とにして、この二教の勢力の消長は、わが文學史に最も大なる關係あることを、忘るべからず。わが國民はその本來の思想感情に、この東洋の二教を融化し、近くはまた西洋思想を移植す。かくして東西兩洋の文學を以て培はれて、將來の日本文學は、その幹ますく、太古、その枝ますく、茂らんとす。

第一章 太古

太古の文學と國民の特質

神代の年歴は知るべからず、建國より奈良朝の末に至るまで、年を経ること千五百年に近しといへども、文學の發達は甚だ遅く、常に單純にして素樸なり。海外の文物も移植せら

自然と人心との關係

れたりといへども、その影響は著しからず、從うて最もよくわが國民が本來の特質を現はせり。國民の氣風は、その國の氣候地勢によりて養はる。日本の本洲が溫暖なる地位にありて、山水極めて明媚なるを思へば、わが國民が自然の景物を愛し、快闊の氣に富み、峻酷の風なきも、偶然にあらざるを知るべし。進取敢爲の性を備へ、雄壯にして武事に勵み、勤勉にして清潔を尙ぶも、またその特質にして、太古の文學はよくこれを現はせり。

一 神代以來

神代より九〇〇頃まで。

この時代の文學

太古、わが國には文字なし、或は神代文字といふものありきといへども、これを以て記したる文學的作品は存せず。この無文時代に、後世の如く發達したる文學は、望み得べからず

歌謠

といへども、歌謠傳説の類は既に存して、口より口に傳誦せらる。これらは後に至りて、古事記、日本書紀等のうちに録せられ、また祝詞、壽詞は延喜式のうちに纂められ、よりて以てほゞこの時代の文學を覗ひ知ることを得べし。

歌謠は形式いまだ定まらず。後世の體の先驅と見るべきもあれども、なほ一句の字數も限られず、短歌、長歌の別も立たず、たゞ長短の句を相交へ、疊句、對句を列ねて、聽くものの耳に快からしむ。いづれも物に觸れ、事に感じて、おのづから聲調の整ひたる言語をなすものにして、後世の題を得て後に思を凝すたぐひにあらず。述ぶるところ、天真爛漫に、喜憂の感、人倫の愛を謠ひ、兵氣を勵まし、時勢を諷するなど、敘情を旨として、敘景詠物の作稀に、たまく、景物を寫すも、敘情の助となすに過ぎず。作中に見ゆる鳥獸草木は、雉、鴨、鹿、猪、蘿蔔、

傳説

蒜、桑、栗の類多く、その歌に入るは、美なるが爲にあらず、偉なるが爲にあらず、日常觸れ易きが爲のみ。傳はるところの歌謠、概ね國民が空想に耽らず、實際を尙ぶ風を現はせり。

神武天皇が長髓彦を討ちたまひし時の御製。

みつくし、久米の子らが粟生には、か葦一莖、其根が莖、其根芽繋ぎて、討ちてし止まむ。

日本武尊が出雲建を討ちてよみたまへる歌。

やつめさす、出雲建が佩ける太刀、黒葛多纏き、眞身なしにあはれ。

神代の傳説は、國土の成立、天神の經世、天孫の降臨等、概ね帝國の起源、祖神の偉業を述べたるものにして、萬世一系の國體、忠勇無比の士風が、堅く人心に銘せられたるは、國初より既に然りしを知るべし。當時の君臣が、相率ゐて、扁舟に棹さして、海外をも征服し、女子もまた軍陣に臨むを憚らざりしこと、遺烈は長へに香ばしきかな。

祝詞は神に申す祭文なり。わが國民はわけて敬神の心深く、國初の政は即ち祭政一致の制なれば、事毎に神に祈り、その折には祝詞をよみ上ぐ。祝詞の體は、ものによりて異同あれども、概ね天孫降臨、開國紀元の様より説き始めて、祈禱の意を述べ、その報謝として、種々の供物を捧ぐる由を申す。五穀豊かに、疫病息み、反亂收まらんことなど、祈禱の主意にして、國民が農耕を主とし、日月風雨等の自然界の威力を恐るゝ風は、おのづからその中に現はる。辭を列ぬること樸實なりといへども、雄渾正大の氣に富みたるは、後世に比を見ず。壽詞も祝詞の類にして、朝廷の大禮、高貴の饗宴などに述ぶる賀詞なり。祝詞、壽詞の最も古きは、神武天皇の時既に存せりといふ。今傳はれるは、この時代のものといへど、なほ後人の潤色もあるべく、また後世の作品もあるべけれど、その體は

大抵もとのまゝを存したり。

祝詞大祝詞の一節

かく宣らば、天つ神は、天の磐門をおし披きて、天の八重雲をいつの千別チワカに千別チワカきて、きこしめさむ。國つ神は、高山の末、短山ミヅカの末に上りまして、高山の伊穗理イホリ、短山の伊穗理イホリをかき別きて、きこしめさむ。かくきこしめしてば、皇御孫の命の朝廷ミカドを始めて、天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧、夕の御霧を朝風、夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を舳解き放ち、艦解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方オノカタの繁木が本を、燒鎌の敏鎌トビもちて、打ち掃ふ事の如く、遺る罪はあらじと、祓ハラヘひたまひ、清めたまふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ、速川の瀬にます瀬織津姫といふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒潮アラシホの潮の八百道ヤホチヂの、八潮道の潮の八百會にます、速開都姫トキヒメといふ神、持ちか、呑みてむ。かくか、呑みてば、氣吹戸イフキドにます、氣吹戸主といふ神、根の國底の國に、氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國にます、速佐須良姫トクサスラヒメといふ神、もちさすらひ

弥

失ひてむ。

二 漢學公行以來

九〇〇頃より一二〇〇頃まで。

三韓の文物の
移植

三韓との交通は神代よりあり、神功皇后征討の軍を發してかの國を服したまひしが、それよりこの時代を通じて、來貢絶えず。應神、仁德二帝の朝、下りて雄略天皇の朝には、殊に海外の文藝を輸入し、建築、機織、その他の工藝も、これが爲に發達して、國運の進歩頗る見るべかりき。

漢學の傳來

應神天皇の十五年(九四四)、百濟の阿直岐來り、翌年そのすゝめによりて、かの國の博士王仁を徵す。皇子菟道稚郎子この二人に學びて、よく經義に通ず。ついで阿知使主も來歸し、これより三人の子孫は、代々文事を掌れり。

文學進歩の遲
緩

かくて漢文世に行はれ、史官も設けられたりといへども、文

歌謠

教の發達は産業の如く著しからず、公文官符の類こそ漢文を用ひたれ、世人は概ね文筆に味く、なほ前代の状態を繼續するに過ぎず。海外文物の傳播も、わが文學に影響することは少かりき。

この時代の和歌は、紀記のほか、萬葉集にも散見すれども、僅かに數首に過ぎず。毎句の字數は漸く五七に傾き、短歌、長歌の別もや、明かになりたれども、内容の單純素樸なることは、前代と大差なし。文學進歩の遅々たること、太古未開の世には、已むを得ざりしなり。

三 佛教傳播以來

一二〇〇頃より一三五〇頃まで。

佛教の傳來と
唐代の文藝

欽明天皇の十三年(一一二二)、百濟の使來りて、佛像經論等を獻じ、佛經の功德を説く。ついで推古天皇の朝、聖德太子萬機

漢學公行以來 佛教傳播以來

を總裁し、佛教の興隆に力め、併せて文運の進歩を計る。これ
 まで公の海外交通は、概ね三韓に限られしが、こゝに至りて
 はじめて使節の隋に赴くあり、遣使の來往これより絶えず、
 學生僧侶は伴ひて支那に留學し、唐代の文藝を輸入す。この
 刺戟にあひて、久しく潛み居たる國民の智力は、一時に發展
 し、制度の改革、服飾の制定、寺院の建築、美術品の製作等、百般
 の事物は燦然として光彩を放つに至れり。

漢文學の勃興

唐代文藝の輸入と共に、わが國の漢文學も勃興せり。聖德太
 子が蘇我馬子と計りて、はじめて編纂せる國史は、惜むべし、
 燒亡して傳はらざれども、また太子の撰に成れる十七箇條
 憲法は、今に存して、當時の漢文の程度を示す。漢字にて記し
 たる金石文も、この時に至りて、はじめて見るを得べし。漢文
 の習得せらるゝに従ひて、また詩賦の詠あり。わが國の最初

儒佛二教の影
響

の詩は、弘文天皇及び皇弟河島皇子の御手に成れり。
 文運の進歩は、佛教の傳來實にこれが動機たり。かの憲法は
 治國修身の訓令にして、儒佛二教の旨を以て倫理の大本と
 す。されど佛教の興隆は儒教を凌ぎ、工藝美術の進歩など、多
 くはその結果なり。ひとり和歌の如き純文學に至りては、い
 まだ外來の二教の影響を見ざりき。

和歌

當時の和歌の萬葉に入れるもの、前期に比すれば、頗る多け
 れども、その性質は著しき變遷を見ず。さるが中に額田女王ヌカダノミコ
 最も才藻あり。その春秋の優劣を比較せる詠の如き、明かに
 國民の生活に餘裕を生じて、典雅なる性情の蒼を開けるを
 見る。百花繚亂たる盛時も遠からざるなり。

四 奈良朝

一三五〇頃より一四五〇頃まで

大化の新政このかた、天智、天武二帝の政事に勵みたまふあり、國運の發達は文學の進歩を促がし、持統天皇の頃より奈良朝にかけて、光彩煥發、太古の文學はこゝに絶頂に達して、後代と異なる一時期を劃したり。

文運大いに開けて、こゝに纏まりたる書籍の編著あり、中にも今傳はれるわが國の最初の古典を古事記とす。この書は、勅によりて、奈良奠都の後、間もなく成り、神代より推古天皇までの歴代の事蹟を述べ、文體は力めて國語のまゝに寫し、質實にして適勁、神代の部は殊に趣味多し。のち數年、詔して更に詳確なる漢文の國史を編せしむ、日本書紀これなり。また古事記と相並んで、諸國の地誌の編纂あり、これを風土記といひ、今僅かに數種を存す。多くは乾枯なる記事にして、ままおもしろき傳説を交ふるに過ぎず。

古事記、日本書紀、及び風土記

古事記、日本書紀、及び風土記

古事記神代の一節

故こ、に速須佐之男命申したまはく、茲からは天照大神に申して罷りなむと申したまひて、すなはち天に參上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りき。こゝに天照大神き、驚かして、我が弟の命の上り來ます故は、必ず善しき意ならじ。我が國を奪はむとおもほすにこそと宣りたまひて、すなはち御髪を解き、御髻に纏かして、左右の御髻にも、御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺の勾璣の五百箇の御統の珠を纏きもたして、背には千篋入の鞆を負ひ、五百篋入の鞆をつけ、また稜威の高靴をとり、帯ばして、弓腹ふり立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、稜威の雄誥び踏み誥びて、待ちとひたまはく、など上り來ませると問ひたまひき。

宣命

體裁の具はれることは、書紀まされりといへども、練磨を歷たるその漢文は、修辭に凝りて、古意を枉ぐる弊ありとて、識者は却つて古事記の國文を貴しとす。されど古事記も、意に害なきところは、漢文體に作りて、これを訓讀せしめたるも

△

漢文學の發達

の、また風土記も、大部は漢文にて、時に國文を用ひたるものにして、純粹なる國文體の散文といふべきは、ひとり宣命あり。宣命は天皇の百官庶民に宣りたまふ文にして、朗讀するが爲に、國語のまゝに綴りしなり。風體の古樸にして莊重なること、頗る祝詞に似たれども、その調や、新たに於て、時に儒佛二教の影響を見るべし。現存せる宣命の最も古きは、續日本紀のうちに見し、文武天皇の時より桓武天皇の時までのものあり。蓋しその以前のものもありしならんが、今傳はず。平安朝以來のものは、徒らに前者を模擬するのみ。祝詞、宣命等の國文を綴るにも、漢字を假らざるを得ず、その他の實用の散文は、概ね漢文を用ふ。古事記の後幾くもなく、書紀の編纂ありしも、一は漢文を尙へばなり。從うて漢文學もますます盛にして、前代の末より詩賦を作るもの漸く多

萬葉集

く、その作は載せて懷風藻にあり。懷風藻(一四一一)はわが國の詩集のはじめなり。聖武天皇の頃には、吉備、眞備、安倍、仲麿等唐に留學し、詩文ともにかの國の學士に比して恥づることなしと稱せらる。若かれども漢詩はなほ幼稚にして、深くいふに足らず、この時代の韻文の精華は實に和歌にあり。萬葉集はこの時代の末に成り、載せたる歌の多數は、この時代のものにして、國民が泰平を享樂して、盛に詠歌し、題詠も漸く生じたるを見る。歌の種類には長歌、短歌、旋頭歌あり。長歌は句數に制限なく、五七の句を幾つも列ねて、五七七にて結び、多くは末に反歌とて短歌を添ふ。短歌は、その實、長歌の最も短きものにして、即ち三十一字の歌なり。旋頭歌は五七七を二度重ねたるものをいふ。世を經るに従ひて、形式かくの如く定まりたれど、一句のうち、一二字の過不及は妨なし。

今一文字、
字一文字、
字一文字、
字一文字、

人麿と赤人

殊に萬葉集の歌は、平安朝以來の如く拘束せられずして、詞の使用も自由なりき。

集中の歌人の最も有名なるは、柿本人麿、山部赤人なり。そもこの時代のはじめは、前代の聖帝の施設によりて、紀綱張り、國運進み、外國文化の採用と共に、國民の自信も固くなり。人麿はこの時に出でて、その絶調は、都の荒れたるを惜み、人の死を弔へる類の歌にあり。まばく、開國紀元より堂堂と國體の存するところを説くこと、祝詞の如くし、ついで本題に移る。赤人は聖武天皇の頃の人にして、自然の景物をよむこと少からず。人麿は長歌に長じ、赤人は寧ろ短歌をよくし、共に雄渾にして雅麗なること、古今に超絶す。當時漢學佛敎盛なれども、二人はその直接なる感化を受けずして、國民が本來の性情を詠じたり。

憶良、旅人、家持

世の中、コトカ
ワコトカ

赤人と同時に、山上憶良、大伴旅人、旅人の子家持等あり。憶良は嘗て遣唐少録となり、旅人父子は共に武官なり。憶良はまばしば人世を詠じ、倫道を説き、旅人は時に恬澹無爲の言を弄し、家持は山川草木の美を賦し、忠君愛國の旨を述べ、題を取ること甚だ廣し。いづれも漢學佛敎の影響を帯び來り、思想はやゝ複雑になりたれども、その歌は、到底、人麿、赤人の高邁なるに及ばず。時に奈良朝の盛運はまさに過ぎ、國政も漸く平かならざらんとす。憶良等の歌は蓋しこの時勢の傾斜に伴へるものなるべし。

この時代の和歌の特質

最もよく奈良朝の文華を代表するものは萬葉集なり。神代以來培ひ來りしもの、こゝに至りて柳櫻桃李の色を競ひ、殊に長歌はその比を見ず。和歌の内容は、率直なる感情をありのまゝに現はして、浮薄虚偽の嫌なしといへども、思想の單

純にして變化少きことは、否むべからず。げにや太古文學の長所は、内容にあらずして、形式にあり。人麿、赤人は、この點において、殆ど完成の域に達したる歌人にして、枕詞を置き、對句を設けて、句を重ねること、漫々たる滄海に波瀾の蕩搖するが如く、歌調の莊重大なるは、後世の纖弱なる風と正に相反す。憶良等がこの二聖に及ばざるは、主としてその措辭の粗雜なるによれり。

吉野宮の長歌及びその反歌

人麿

やすみししわが大王神ながら神さびせすと、吉野川たぎつ河内に、高殿を
 高しりまして、上りたち國見をすれば、た、なづく青垣山、山神の奉る御調
 と、春へは花かざしもち、秋たてばもみち葉かざし、遊副川の神も、大御食に
 仕へまつると、上つ瀬に鵜川をたて、下つ瀬に小網さし渡し、山川もよりて
 つかふる神の御代かも。
 山川もよりてつかふる、神ながらたぎつ河内に船出せすかも。

ヤスミシカニ
 オホキミノミコト
 イマニヤル

富士山の長歌及びその反歌

赤人

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原ふり
 さけ見れば、わたる日の影も隠るひ、照る月の光もみえず、白雲もい行きは
 ばかり、時じくぞ雪はふりける。語りつぎ言ひつぎゆかむ、富士の高嶺は、
 田兒の浦ゆうちいでて見れば、眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける。

當時の短歌の例

近江の湖、ゆふなみ千鳥、ながなけば、心もまぬに古おもほゆ。 人麿
 春の野に、堇つみにと來し吾ぞ、野を懐かしみ一夜ねにける。 赤人
 土やも空しかるべき、萬代に語りつぐべき名は、立たずして。 憶良
 いざ兒ども、香椎の瀨に、白妙の袖さへぬれて、朝菜つみてむ。 旅人
 たなばたし船のりすらし、まを鏡清き月夜に雲たちわたる。 家持

第二章 平安朝

文學の貴族的傾向

平安朝凡そ四百年は、古代文化の最も光彩ある時代にして、

文事偏重の弊

江戸幕府の世と併せて、わが國における文運極盛の二紀とす。されど當時の文化は、上流の間に限られて、一般の社會にゆきわたらず、人民の智能は、貴賤の間に、大なる逕庭あり。従うて事物の發達すべて貴族的傾向を帯び、第宅衣服等、實用を忘れて、粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして優麗を喜ぶ。されば文學においても、物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の媒介として、帝都上流の間に行はるゝのみ、下流の状態を寫したる作品は、殆ど世に出でざりき。

尙武は邦人の通性にして、建國以來、大政に參與せしものは、武門に出でたりき。されど平安朝を通じて朝廷に跋扈せし藤原氏は、祭祀を司りし中臣氏より岐れて、もとより文事を尙び、泰平に馴れては武事を卑み、安逸遊惰に流れ、虚儀禱禮を事とす。文事を尙へば、文學の流行せるも、當然のことにして、

佛教の感化

て、詩歌は管絃と共に、上流の人が必須の技と稱せらる。されど武事を卑めば、文學の優柔なるも、また當然のことにして、女子の宮廷に勢力ありしより、わけて纖弱の趣味を育成せり。加ふるに文弱の公卿は、山河襟帶の平安城に籠居して、遠く出遊せず、悠々たる生活極めて單調なれば、思想の變化を生ぜず。従うて文學も狭く一局面にばかり發展し、一旦その頂點に達しては、停滯し、沈衰するのみなりき。

漢文學も前代よりひき續きて重んぜられたれど、儒教は却つて佛教に壓せられて、人心を感化すること、到底、彼に及ばず。佛教は、この時代のはじめ、天台、眞言の二宗更に傳來して、朝野に播まり、貴族の出家するも少からず。文學にも、人世のはかなく、宿命の免れがたきをいふこと、多くなりしかど、いまだ快闊なる邦人の性質の根柢を動かすに至らず。寧ろ法

美を愛し情を重んずる風

事供養の儀禮を盛にして、現世の利益を祈ることを、その頃の習とすれば、佛教の隆盛と稱するも、内容よりは形式の上のことなりきといはざるを得ず。

太古以來、邦人は、老幼憐み、部伍睦みて、人に殘虐の行なく、おのおのその業に安んじて相侵さず、無爲にして化すといふ様なり。因襲風をなし、儒佛二教傳來しても、これによりて人心を箝束する要を見ざりき。平安朝に至りても、なほ往古のまゝに、性に順ひて行動して、外來人爲の道義は、制裁の力甚だ薄し。きりとて意馬心猿の奔放に任するにはあらず、力めて典雅優美なる性情を養はんとす。かくして取るところの人生の尺度は、善よりも美なり、教育は意の鍛冶にあらずして、情の薰陶なり、當時の人士が希ふところは、趣味の中庸なり。志かれども情は狂ひ易し、物質的文化の開けて、これを制

詩文の隆盛

怪身よあ
あしんも
行ハレス
詩文もす

御すべき道義の存するなければ、その弊や浮華蕩逸に流る。平安朝の社會は即ちその適例にして、従うてその文學も、實を失ひて華に過ぎ、輕靡綺麗なるを以て特性とす。

一 弘仁時代

一四五〇頃より一五五〇頃まで。

漢字のはじめて傳はりしより維新の際までは、學問といへば、いつの世にも、第一に支那の文學、儒學を擧げたりといへども、この時代の如く、漢文學のみ行はれしことは、稀なり、中にも嵯峨天皇の時を甚だしとす。既に大化改新の頃より、漢學は興隆の運に向ひ、爾來、年を重ねるに隨ひて、ますます盛なりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を獎勵したまへば、その流行は驚くべく、京都の大學、地方の國學の外に、藤原氏の勸學院をはじめ、名門貴紳が私學を設けて、一族の子弟を教育す

弘仁前後の詩
集と詩人—空
海と篁

るもの多し。教ふるところ、經書、律令、算術等もあれど、唐代の學風を受けて、専ら詩文を重んじ、學者のうち文章博士の位置最も高し。儒教の振はざりしも、偶然にあらざるなり。勅によりて編成せられし詩集には、わか凌雲集、わか文華秀麗集、わか經國集あり、いづれも弘仁前後の詩を集む。平城嵯峨、淳和三帝みな詩を詠じたまひしが、殊に嵯峨天皇は才藻に富み、その皇子、皇女また詩文をよくしたまふ。されどこの時代の漢文學興隆の先達には、僧空海を推さざるを得ず。空海は教界一派の開祖たると共に、また文學の恩人なり。その唐に留學するや、佛教研修のかたはら、詩文を學び、歸朝の際には、かの國の有名なる詩文集を携へ歸る。わが國の漢文學は、蓋しこれより蔚然として興れるなり。空海と殆ど同時に、小野篁あり。詩才豊かにして、その作遙かに群を抜けども、狷介にして世と

その後の詩人
—道眞

相容れざりき。

清和天皇以來は、都良香橘廣相、菅原道眞等詩文に長ず。中にも道眞が、平易暢達なる辭を以て、悲慘なる實境を詠じたる詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されどこの頃より、大江、菅原の二家は、文學界における門閥の位置を占め、階級の固定は漸くその道を不振ならしめたり。

支那文學の影
響

梁、昭明太子

當時の詩人が愛誦したるは、六朝より唐代にかけての詩文にして、文選、白氏文集殊に重んぜらる。これらの漢文學が、わが社會と文學との上に影響せしことは、甚だ大なり。浮華驕奢、四時の遊觀の盛なるが如き、一はこれが爲なるべく、わが國の詩家歌人が詠出したる題目も、彼に得たるもの多し。文辭は、惜しいかな、盛唐以前の四六駢儷體に則りて、却つて眞情の流露を妨げ、語句の措置にのみ苦心して、纖麗の態を喜

歌風の變遷と
當時の歌人
業平、遍昭、小
町

び、漢文學はこれより衰微の運に向へり。
弘仁の頃は、漢文學流行を極めて、和歌は一時屏息の様なり
しが、清和天皇以來、やゝ頭を擡げて、漢詩と並び行はる。これ
もまた時俗と漢詩との化を受けて、華美蕩逸の體をなす。奈
良朝には、歌人即ち武人なるもの少からず、隨うて和歌も剛
壯の氣ありしに、今は文弱なる貴族が席上唱和の具となれ
ば、その風の變化せしや知るべし。かくて強健なる五七の調
は七五に轉じ、長歌は殆ど衰滅せんとし、爾來この風永く渝
らず。在原業平は當時第一の歌人なり、眞率なる詩想の迸出
するに任せて、辭句の修練の如きは、深く注意せず。僧正遍昭
小野小町また聲名を齊しくす、遍昭は想を練り、辭を飾るに
過ぎ、小町は纖弱の態よく女性の作たるに合へり。

ま降。た。る。后

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして。 業平

ま。の。し。り。も

主観的叙述

終にゆく道とはかねてき、しかど、昨日今日とは思はざりしを。 同
はちす葉のにごりにままぬ心もて、なにかは露を玉とあざむく。 遍昭
色見えでうつろふものは世のなかの人の心の花にぞありける。 小町

神樂、催馬樂

當時また神前に樂器に合せて奏するうたひ物に神樂、催馬
樂あり、平安朝の半を過ぐる頃まで、盛に行はる。神樂の一部
は普通の短歌にして、その一部と催馬樂とは民間の俚謠よ
り取れるもの多し。これらの俚謠は、概ね奈良朝の末よりこ
の時代にかけてのものなるべし。この時代にはなほ前代の
餘風を存して、下流の人の作をも尊重したること、これにて
も知るべし。

假名の弘通

久しく漢文は行はれしかど、なほ言ふところを自在に筆に
するは、容易きわざにあらず。よりて奈良朝には、字を假りて
音を寫す萬葉假名なども用ひられしが、これも複雑なれば、

竹取物語と伊勢物語

ついで平假名片假名の製作あり。この假名は、奈良朝よりこの時代にかけて、次第に出来しものなるべく、その使用の弘まるに随ひて、竹取物語の如き小説を見るに至れり。竹取物語の主意は、昔竹を伐り出して生計とする翁ある時、竹の中より一小女を得たり。これや、もと月界の仙女の罪を得て、一時下界に下れるもの、その光るが如き容姿によりて、赫耶姫の名あり。貴人顯官娶らんとすれども應ぜず、遂に月宮に歸り去りぬといふにあり。蓋しわが國の傳奇小説のはじめなるべく、その文も極めて古樸なり。これと前後して伊勢物語あり。思ふに業平が己の歌に併せて古歌をも取り、假想をも加へて、面白くかきなしたるものなるべし。その文の簡潔はその歌の眞率と相待ちて、敬重するに足る。後人これに蛇足を添へて、眞偽頗る辨じがたし。

二 延喜天曆時代

一五五〇頃より一六五〇頃まで。

延喜時代—詩文の衰微と和歌の興隆

平安奠都以來、年既に久しく、紀綱漸く弛みて、都鄙懸隔し、地方離叛の勢は成らんとすれども、帝都の文化はいよく、光彩あり。世に醍醐天皇の朝を延喜の聖代と稱す。前期は専ら外國の文藝を謳歌せしが、今やわが文化の發展に伴ひて、國民の自信は長じ、勢は移りて、純一なる國民的文藝を歓迎す。繪畫には巨勢金岡ありて、美術を國風に化し、文學には和歌盛に行はれて、漢詩を壓す。ましてこの時代のはじめ、宇多天皇の朝に、唐の亂によりて遣唐使も廢せられて、漢文學の研究も漸く衰ふ。前期の漢學者多くは歿して、紀長谷雄、三善清行等僅かに残れるが、一方には紀貫之、凡河内躬恒等の歌人新たに出現して、弘仁の詩文隆盛は延喜の和歌勃興と變

古今集

貫之、躬恒、伊勢

代もこの人
おもひ

れり。延喜五年(一五六五)貫之、躬恒等勅を奉じて、古今和歌集を撰し、萬葉集以後、當時に至るまでの歌を集む。歌體こゝに至りて確立して、主觀的敘情を主とし、優麗の調を尙び、後世永くこれに則りて、大に變ずることなかりき。
古今集の編成は、貫之の功重きに居る。貫之の歌を作るや、刻苦經營、想と辭と相合はしめんとして、一語一句苟しくもせず、眞に雅正の氣あり。後世彼を歌道の宗として、人麿と併せ稱す。躬恒これと並び立ち、才氣の横溢を以てまされり。伊勢御息所また小町について重名ありき。

ひとはいさ、心もまらず、故郷は花ぞ昔の香ににほひける。
逢坂の關の清水にかげみえて、いまや曳くらむ、望月の駒。
手に掬ぶ水に宿れる月影の、あるかなきかの世にこそありけれ。
春の夜の闇はあやなし、梅の花、色こそ見えぬ、香やは隠る、
住の江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つゝまらなみ。

貫之
同
同
躬恒
同

貫之の散文

散りちらす聞かまほしきを、故郷の花見て歸る人もあはなむ。伊勢
貫之は和歌のみならず、散文にも力を盡し、これより假名文大に世に行はる。貫之の作に古今和歌集序及び大堰川行幸和歌序あり、共に漢文の脈絡を應用し、彼我二式を融和して、國文の一體を開く。されど駢儷體より出でて、やゝ華麗に過ぐる難なきにあらず。貫之また晩年に土佐日記を作る。これは著者が土佐の國守の任果てて京に上りし海路の日記にして、自ら一婦人に擬して書きたり。文體簡淨にして、諧謔を交へ、國文の軌範と稱せらる。

土佐日記正月二十一日の條

二十一日、卯の時ばかりに船いだす。みな人々の船いづ。これを見れば、春の海に木の葉しもちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ。風もふかす、よき日いできて漕ぎゆく。この間に使はれむとて附きてくる童あり、それがうたふ歌。

なほこそ國の方は見やられるれ、わが父母ありとし思へば、かへらや。
 とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ、漕ぎくるに黒鳥といふ鳥巖の
 上に集まり居り、その巖のもとに浪白くうちよす。楳取のいふやう、黒鳥の
 もとに白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやうにぞ
 きこえたる、人のほどに合はねば、咎むるなり。かくいひつゝ、ゆくに、船君な
 る人、浪をみて、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふう
 へに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十、八十は海にあるものな
 りけり。

わが髪カミの雪ユキと磯邊イソノヘの白浪シロナミといづれいづれまされり、沖ナミつ島守シマノリ。

楳取ヒメいへ。

天曆時代一詩
 歌の盛衰

村上天皇の朝は、天曆の聖代とて、延喜時代と並べ稱せらる。
 天慶承平の亂こゝに終りて、都人は更に泰平に安んじ、學者
 文人また輩出す。延喜時代の反動として、漢文學や、復興せ
 るが如く、天皇をはじめ、大江朝綱、菅原文時等詩をよくし、源

に相

後撰集と拾遺
 集

順シカフは詩歌ともに衆にぬきんづ。されどいづれも全詩の結構
 よりは、寧ろ一二句の修辭に苦心して、器局小に過ぎ、畢竟漢
 詩の衰運に向ひたるは、疑ふべからず。和歌は盛に行はれて、
 これを詠ずるもの日々に多し。天曆五年(一六一二)、源順等勅
 を受けて後撰和歌集を撰す。これを古今集に比するに、大體
 において劣り、措辭や、蕪雜に流れたり。その後、また拾遺和
 歌集の撰ありしが、後撰と共に、古今の前轍を蹈むのみにし
 て、出藍の譽を得ること能はざりき。

宇津保物語等

假名の使用はますく、擴張し、散文も漸次複雑となりて、こ
 こに宇津保物語の長篇を出すに至れり。宇津保は清原俊蔭
 の外孫藤原仲忠といふ貴公子と、貴宮ミヤノミヤといふ姫君とを、主人
 公として、貴族の生活を寫す。人生の描寫を主とする小説は、
 これをはじめとすべく、九百年に餘れる昔に、この大作あり

しは、歎美に堪へたれども、その缺點は情を寫して眞ならず、辭を行ふことも粗なるにあり。當時の小説にまた落窪物語あり。落窪の君とて、繼母に虐げられたりし女の、左近少將なる人の妻となりて、立身出世せりといふ譚にして、滑稽の趣味に富む。右大將道綱の母が蜻蛉日記は敘述頗る精細、土佐日記の簡淨と相待ちて、日記紀行類の雙璧と稱すべし。

三 藤原氏全盛時代

一六五〇頃より一七五〇頃まで。

この時代の上半は、即ち關白道長が、この世をばわが世と稱して、闕けたることなき榮華に誇りし時にして、藤原氏の勢力絶頂に達し、一門宮廷に跋扈して、花月の遊に耽れば、文藝も隨うて燦爛たる光彩を放ち、優美なる平安朝の特性は最もよく發揮せらる。漢文學は、男子が唯一の學問として行

道長得意の時
假名文全盛

上流の風俗
女流の文學

はれたれども、國民的風潮の文藝の上に蔓りたる時、既に傾き來りし運命の回復すべくもあらず。今や文學の中心は全くその垣の外に出で、當時の傑作は實に假名文を以て記されたり。若かも學問に誇れる公卿は、これを卑みて用ひず、いはゆる女文字に甘んぜし女子をして、却つて千歳不朽の名を博せしめたり。

當時の廷臣は京都に蟄居して、地方の事を知らず、行政軍事を賤みて、宴飲管絃に荒み、後宮に出入して、宮女と和歌を唱和するを事とす。權力扶殖の手段としては、名流貴族いづれもその女を後宮に納れて、皇室の外戚とならんことを望む。かくて禁中には、多くの女御更衣互に榮寵を競ひ、おのゝ才能ある女子を侍女として相誇る。さればこそ當時の女流には文學に秀でたるものの輩出せしにて、その歌ふところ、

清少納言と紫式部枕草紙と源氏物語

書くところ、京都のこと、また殊に宮廷のこと多く、その風の
ますく、優美柔弱に流れたるもこれが爲なり。
當時の女流の最も文才あるを清少納言、紫式部とす。二人は
たゞに當時の第一流と稱すべきのみならず、古今を通じて
また第一流の文學者なり。清少納言は一條天皇の皇后定子
（道長の兄關白道隆の女）に仕ふ。その著枕草紙はわが國の隨
筆のはじめにして、見聞せるまゝ、思ひつきたるまゝを、筆に
任せて敘述し、寸鐵人を殺す趣あり。筆鋒の銳利なるは、その
才の男子を凌ぐを知るべく、觀察の緻密なるは、女子の特性
を現はせり。紫式部は一條天皇の中宮彰子（上東門院といふ、
道長の女）に仕ふ。源氏物語五十四帖はその筆に成り、光源氏
といふ貴族を主人公とし、これを中心として、多くの婦人を
點出して、よくその一々の品性を描寫す。中にも源氏の妻紫

上は、式部が理想の女性として寫せるものなり。源氏薨じて
後は、その子薰大將を主人公とし、失意の境遇に置きて、その
父の得意に對照せしむ。巧に長篇を組織して、抑揚波瀾よく
整ひ、修辭精到にして流麗なり。さればこの書を以てわが國
第一の小説と稱するは、當然の評なり。

うつくしき物（枕草紙の一節）

瓜にかきたる兒チヤの顔。雀の子のねすなきするに躍りくる。また紅ニなどつけ
てすゑたれば、親雀の蟲などもてきてく、むるも、いとらうたし。三ツばかり
なる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに
見つけて、いとをかしげなる指オヨビにとらへて、大人などに見せたる、いとうつ
くし。あまにそぎたる兒の、目に髪カミの覆ひたるを、かきはやらで、うち傾きて
物など見る、いとうつくし。手タスキ細がけにゆひたる腰の上カミの、白うをかしげな
るも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてあり
くも、うつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむほどに、

かいつきて寐入りたるも、らうたし雛の調度蓮の浮葉のいと小さきを池よりとりあげて見る。葵の小さきも、いとうつくし。何もく、いと小さき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる兒の二ばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など衣長くて、手細あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八九十ばかりなる男兒の、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏の雛の、脚高に、白うをかしげに、衣短かなる様して、ひよくとかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨の卵、舍利の壺、撫子の花。

光源氏が須磨のわびすまひ (源氏物語須磨の巻の一節)

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人すくなにて、うち息みわたれるに、一人目をさまして、枕を敬て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゝこ、もとにたちくるこ、ちして涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。琴を少しかきならしたまへるが、われながらいとすごうき

こゆれば、ひきさしたまひて。

こひわびてなく音にまがふ浦浪は、思ふ方より風やふくらむ。

とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、まのばれて、あいなう起きあつ、涙をまのびやかにかみわたすげに、いかに思ふらむ、わが身一により、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝ、にいろくの紙をつぎつ、手習をしたまひ、珍らしき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさびたまへる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり、人々の語りきこえし海山の有様を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞすまひ、二なくかき集めたまへり。この頃の上手にすめる千枝常則などをめして、作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろく、さき亂れ、おもしろき夕暮

ヤキタテモナク
ネタアモナク

に、海みやらる、廊に出でたまひて、佇みたまふ御様のゆ、しう清らなること、所からはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のなよ、かなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯玄どけなく、うち亂れたまへる御様にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆる、かによみたまへる、また世にまらすきこゆ。沖より舟どものうたひの、じりて漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらる、も、心細げなるに、雁の列ねてなく、聲、織の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるるを、かきはらひたまへる御手つき、黒木の御數珠にはえたまへるは、……人々のこ、ちみな慰みにけり。

和泉式部、公
任、好忠

和歌にて、當時無雙の名家は和泉式部なり。和泉式部は紫式部と同じく、彰子に仕へ、天稟の詩才、物に觸れ事に感じて、咳唾珠をなす。藤原公任は和漢の學に長じ、歌道においても第一の先達と稱せられしが、舊習を墨守して、その實は名にかなはず。これに反して、曾根好忠は時風の因循固陋に厭き、ひ

升後、
任、好忠

道長薨後の類勢

とり用語の自由、格調の變革を唱へたれども、その作に險難の語句多く、世人はこれを卑しとして顧みざりき。

道長薨じて後、藤原氏の勢や、傾き、國運もまた振はず。地方には平忠常の亂、前九年の役あり、武人處々に地を占めて、漸く實力を養ひ來る。藤原氏と共に浮沈せし文學も、こゝに至りてまた漸衰の運に向はざるを得ず。當時の編著にして見るべきものは、邦人の漢詩文を選びたる本朝文粹、和漢天竺の雜談を集めたる今昔物語などあるのみ。小説はますます流行し、新作もひき續きて世に出で、狹衣、濱松中納言等殊に傑作と稱せられたるが、いづれも源氏物語を模範とし、様によりて胡蘆を畫くに過ぎず。その技は既に下りて、内容の進歩を見ず、強ひて事實に波瀾を求めて、描寫の庸劣を補はんとする傾向ありき。

四 院政時代

一七五〇頃より一八五〇頃まで

院政時代の概観

後三條天皇英邁の資を以て親しく政を視たまひしより、藤原氏の権力は衰へ、引いて院政の世となりぬ。紀綱や、伸張し、人心また興奮せりといへども、白河、鳥羽の二帝奢侈を好みたまひ、君臣ともに容儀を修すること婦人の如く、後三條天皇の振肅も直ちに弛みて、風俗はますます、浮華に流る。源平鬭争の世、京都も禍亂の巷となりしが、月卿雲客なほ姑息の安を貪りて、舊習を更むるを喜ばず。かゝる時、長篇大作の出づること稀にして、一時の唱和、半日の消閑に便ある短歌が、ひとり流行を極めしも、偶然にあらず。近郊の離宮には、月雪花の遊觀絶えず、遊觀あれば詠歌あり、歌合の會、百首の詠に、巧を競ひ、技を鬭はせて、たゞ後れんことを恐る。されば短

和歌の新體
—
經信、俊賴

歌が面目を改めたれども、なほ色ありて香なき剪綵の花にも譬ふべきは、時勢の然らしめしなり。

古今集の風調は、歌道の正風として、久しく行はれたりしが、世人は既にその陳套に飽きて、變革の機次第に迫る。この時に當りて、改新の旗を翻へししを源經信とす。その子俊賴出藍の才を以て、大に新體を唱へ、藤原基俊保守の見を懷いて、俊賴と衡を争ひしかど、天下は靡然として新體に傾く。新體は前期の曾根好忠の詠に得るところ多く、日常の俗語を探り、或は萬葉の古辭を探りて、用語を自由にし、また助辭を略し、名詞にて結びなどして、句格を緊密ならしむ。殊に多とすべきは、和歌の題目を擴め、老ばく、客觀的に自然の景物を詠ずるに至れることなり。されどその弊や、奇を好み、俗に流れ、蕪雜にして統一なく、擾亂せること、恰も源平の争の如く

俊成と千載集

なりき。

時に藤原俊成千載和歌集を撰して、新體の長短を取捨す。溫雅にして清新なる一體、こゝに至りて漸く定まれり。されどこの改新も根本的の轉化にあらず、社會の思想に變動なければ、和歌の内容も舊の如くにして、たゞその形式において、纖細の技を弄し、綺麗の調を喜ぶのみ。さるが中に群を抜き、て異色ありしを、僧西行とす。

西行

西行はもと武門の人なり、世をはかなみて出家し、四方を周遊して、風月を友とす。常に山水の景に接して、天成の才を養ひ、詞句に拘泥せずして、自在に感想を吐露す。時に佛教の腐敗も既に久しくして、こゝに革新の氣運に向ひ、新たなる宗教まさしに起れり。西行この時に出でて、詠ずるところ佛教の趣味多く、和歌の内容に深邃の度を加へたり。古來彼を推し

道に、入に
草花波よる
秋のゆふぐれ

て、わが國有數の歌人とするも、故あるなり。

夕されば門田の稻葉おとづれて、蘆のまろやに秋風ぞふく。

經信

うづらなくまのの入江の濱風に、尾花波よる秋のゆふぐれ。

俊賴

あすも來む野路の玉河萩こえて、色なる波に月やどりけり。

同

夕されば野邊のあきかせ身にしみて、鶉なくなり、深草の里。

俊成

すみわびて身を隠すべき山里に、あまり隈なき夜半の月かな。

同

吉野山やがていでじと思ふ身を、花ちりなばと人やまつらむ。

西行

道のべに清水流る、柳陰をばしとてこそたちとまりつれ。

同

歌論の勃興

寢食を忘れて思を凝し、歌合に、み方の美をあげ、敵手の疵を索めて、論難品評すれば、和歌の流行と共に、歌論の學も勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。古くは、古今集以前、既にその式を立てしものありといへども、信じがたし。前期に藤原公任出でて、やゝ體を備ふるに至りしが、この期に至りて、歌論ははじめて盛なり。藤原基俊博覽に誇

朗詠と今様

りて、一家の見を立て、藤原俊成これに學びて、別に家學を開き、天下の師表となる。藤原清輔及びその弟僧顯昭また歌論に名あり。されどいづれも深遠なる考究あるにあらずして、淺薄なる形式の論、無益なる舊例の争のみ。

うたひ物としては神樂、催馬樂も珍しからず、平安朝の中世以來、朗詠、今様盛に行はる。朗詠は曲節を設けて詩句短歌を朗吟するなり。今様は七五の句を重ねたるものにて、その句數の四なるもの殊に多し。平安朝のはじめ、既に佛敎を讚したるものなど見え、いろは歌の如きもその一なりしが、この時代の婉柔なる時様を好む風に投じて、わけて盛に行はれ、ついで次期にも及べるなり。

舊都の詠 (今様)

古き都をきて見れば、

淺茅が原とぞなりにける、

藤原實定

國文體の歴史
—大鏡等

月の光はくまなくて、
あき風のみぞ身にはしむ。

この時代において、散文の見るべきは、僅かに大鏡等の存するのみ。大鏡は史記に倣ひて作れるものにして、筆路頗る勁拔なり。榮華物語もこれと前後して出でたるものなるべきが、冗漫の誹を免れず。二書ともに、關白道長を中心として、藤原氏の榮華を寫し、わが國の國文體の歴史のはじめなり。

第三章 鎌倉室町幕府の世

文學の不振

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。武人權力を握りて、兵事に勵み、戰亂をばく起りて、庶民は疲勞し、從うて文學も衰微して、雄篇傑作を見ず。出づるところ、多くは見聞の事蹟もしくは古事來歴を記述したる軍記、雜錄、隨筆、有職の書などにして、想像力によるもの少く、これあるも創見

文學の佛教的傾向

なく、古文辭を補綴するのみ。要するにこの時代は文學振はず、たゞ平安、江戸の二盛時を繋ぐ連鎖たるに止まれり。公卿は政權を失ふと共に、意氣も沮喪し、絶えず和歌を玩へども、因循姑息にして、古人の糟粕を嘗むるに過ぎず。武人は文事を輕んじて、文學に志すもの多からず。この時に當りて、武家の祐筆となり、參謀となりて、専ら文筆に従事したるものは、僧侶にして、純文學も多くはその手に成れり。さればこの時代の文學に、佛教的傾向の存すること、平安朝よりも甚だしく、至るところ無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるが爲にして、一は時勢の然らしめしなり。當時、頻繁なる變亂は、社會をしておのづから厭世に傾かしめたる折しも、禪、淨土、一向、日蓮等の新宗派、或は支那より傳はり、或はわが國に起りて、大に行はれ、深く人心の根柢に染みたるこ

と、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。儒教の影響の文學に現はれたることもあれど、佛教に壓せられて、その勢力は微々たりき。

一 鎌倉時代

一八五〇頃より一九八〇頃まで。

鎌倉初期の盛況

鎌倉時代のうち、文壇の最も賑はひたるを、そのはじめ三四年とす。時に後鳥羽天皇帝室の式微を憂へ、銳意事に當りたまへば、都人もまた關東の勝利に憤慨して、新たに活氣を生じ、文藝もこれが爲に一時の盛況を呈したり。

文學は前期にひき續きて、和歌最も盛なり。元久二年(一八六五)後鳥羽上皇の勅によりて、藤原定家、同家隆等、新古今和歌集を撰す。延喜よりこの時に至るまで、和歌の勅撰八度に及びしが、そのうち古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は千

新古今集

扶養ハ
ヨクニ
ん
ん

當時の歌人
定家、家隆等

鬼
舞
舞
舞

載の歌風を大成したるものにして、彼の清新の體を節するに、更に古今の古調を以てしたるなり。
上の好むところ下これに靡き、當時有名なる歌人輩出す。後鳥羽、土御門、順徳の三帝、ともにその道を得たまひ、攝政藤原良經は天授の才を以て時流を詠じ、その叔父僧慈圓は西行に學びて、好んで佛教の趣味を含め、將軍實朝は萬葉の古調を喜ぶ。定家は俊成の子にして、家隆と共に、名匠の譽一世に高し。定家は古語の平穩なるを喜べども、措辭は巧緻を極めて、時に了解に苦むものあり、家隆は暢達の調を用ひたり。

われこそは新島守よ、隱岐の海のあらし浪風心してふけ。後鳥羽上皇
足柄の關路こえゆく玄の、めに、一むらかすむ浮島が原。良經
思ふことなど問ふ人のなかるらむ、仰げば空に月ぞさやけき。慈圓
武士の矢並つくるふ小手の上に、霰たばしる奈須の篠原。實朝
山のはの月まつ空のにはふより、花にそむくる春のともしび。定家

ホー
ー
ト

和漢混交の文
體—方丈記

あけばまた秋の半もすぎぬべし、傾く月のをしきのみかは。
かすみたつ末の松山、ほのくくと浪にはなる、横雲のそら。

同
家隆

平安朝のなかば頃より、漢學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文をかきえず、こゝに和漢混交の一體を生ず。衰ふるは興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の遒勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となりたるなり。この文體を以て記したるものにて、最初に成功したるは、方丈記等なるべし。方丈記は、鴨長明が源平相争ひて、紛擾たえまなき世を厭ひて、山城の日野に隱棲せる始末を記せる短篇にして、文章の絢爛なるを以て顯はる。

更にこの和漢混交體の大に光彩を放ちたるは、源平争鬪の始末を記したる軍記類なり。そもく源平二氏が盛衰の迅

軍記の勃興

鴨長明
方丈記

目で見んまう
ハシロ同デ
キ、コ、ウ、シ
ハレ、ニ、ウ、バ
又、ニ、ウ、バ
コ、ウ、シ、ウ、バ
陽気て
風

速なるや、これを見聞するものの感懐は、うた、假作小説よりも深し、こゝにおいて軍記の作あり。その最初に出でたるは保元物語、平治物語にして、文章や、質實なり。ついで平家物語は曲節をつけて、諷誦せんがために作られしものなるべく、その體懐惋を主とす。殊に佛教の思想を鼓吹し、記事は勇武なる章と優美なる章と交錯して、興味を深からしむ。源平盛衰記は蓋しこれを補訂大成せしものなるべく、文章華麗にして、漢語を交ふること、平家より多し。これらの軍記は、いづれも源平争鬪の世より建長年間までの作なるべし。

大原御幸の一節 (平家物語)

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉にみゆる梢には、春のなごりぞをしまる、卯月二十日餘のことなれば、夏草のまげみが末をわけいらせたまふには、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたるほどもおぼしめしやられて哀なり。西の山の麓に一宇の御堂あ

り、即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水、木立よしある様の所なり。いらかやぶれては霧不斷の香をたき、とぼそおちては月常住の燈をか、ぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の若草まげりあひ、青柳絲を亂りつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫にさける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹さきみだれ、八重立つ雲のたえまより、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを觀覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩のたえまよりおちくる水の音さへ、ゆるよしある所なり。緑蘿の垣翠黛の山、繪にかくとも、筆も及びがたし。女院の御庵室を觀覽あるに、軒には蔦あさがほはひか、り、まのぶまじりの忘草、瓢箪まば、空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深くとざせり。雨原憲が樞をうるほすともいひつべし。すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に争ひて、たまるべしともみえざりけり。後は山前は野邊、いさ、小笹に風さわぎ世にたえぬ身のならひとて、うきふしまげき竹柱、都の方の言づては、間遠に

ゆへるませ垣や、わづかにこととふものとは、峰に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゝら、くる人稀なる所なり。法皇人やあるく、とめされけれども、御いらへ申すものもなしや、ありて老い衰へたる尼一人まゐりたり。女院はいづくへ御幸なりけるぞと仰せければ、この上の山へ花つみに入らせたまひて候ふと申す。……や、あつて上の山より濃き墨染の衣きたりける尼二人、岩のかけちをつたひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなる者ぞと仰せければ、老尼涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、じとりぐして持たせたまひて候ふは、女院にてわたらせたまひ候ふ。つま木に薇折り具して侍ふは、鳥飼、中納言維實の女、五條、大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言、典侍の局と、申しもあへず泣きけり。法皇御涙せきあへさせたまはず。女院は世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見え參らせんすらん耻しさよ、消えもうせばやと、おぼしめせども、かひぞなき。宵々毎の關伽の水むすぶ袂もまほるゝに、曉おきの袖の上山路の露もまげくして、まぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、また御庵室へも入らせ

鎌倉中期以後
の非運—雜錄
類

歌道の門閥と
その衰微

おはしまさず、呆れて立たせまし、たるるところに、内侍の尼參りつゝ、花がたみをばたまはりけり。

承久の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎はいよく、堅く、これより京都は獨立自由の思想を失ひ、萎靡して振はず。關東の武士はもとより文筆に疎ければ、鎌倉時代中期以後の文學は見るべきもの少し。散文には、建長年間に出でたる十訓抄、古今著聞集、および時代定かならぬ宇治拾遺物語等のや、見るべきあるのみ。これらはいづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來のおもしろく珍らしき事實を、輯めたるものにして、率直平易なる文體にてかきたり。

和歌の衰へたるも散文に同じ。人心は漸次萎縮せるに、藤原俊成、定家二代相續いて名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸す。その子孫は二條、京極、冷泉の三家に

別れて、互に反目せしが中に、二條家は嫡流として殊に榮え、歌集の勅撰も多くはその一門より出でしが、その家を尊くせんが爲に、種々の法式を設けて、子弟を束縛したれば、斯道は却りて日々に萎縮するに至れり。

二 南北朝

一九八〇頃より二〇五〇頃まで。

南北朝の概観

建武中興の業成り、幾ばくもなくまた壞れて、南北兩朝分争の世となりしが、政治の中心は關東より畿内に復せり。輦下の貴紳は懶眠より覺めて、更に政治にあづかり、京吉野と相争へば、一般に活氣を生じたること、鎌倉時代のはじめの如し。戦うて利なきは憤慨の情を文筆に漏らし、亂離の變にあひては、人生の險に恐れ、隱遁の安を説く。これ南北分争の間、多く見るところなりき。

頓阿と良基

和歌は黨同伐異の弊を受けて、微々として勢なし。時に僧頓阿二條家の門を出でて、二條の中興と稱せらる。一時みなこれに靡けりといへども、歌風甚だ平凡なり。關白二條良基頓阿に學びて、和歌に長じたるが、その得意とせしは、寧ろ連歌連歌のことは次にありき。節に説くべし。にありき。

徒然草

僧兼好頓阿と親しく、また和歌を以て名ありしかど、その不朽の譽は徒然草によれり。徒然草は兼好の隨筆にして、趣味を談じ、人情を説き、またよく老佛の説を融化す。文章暢達にして雅馴、世に枕草紙と併せて、隨筆の雙絶とす。蓋し佛教流行の習として、平安朝このかた、一旦の悲哀により、もしくは來世の功德と稱して、佛門に入るもの多く、中には堅固の出家にもあらで、閑靜の境を愛し、花月の美を愛して、悠悠自適するもの少からず。徒然草は即ちこの半僧半俗者流の思想

神皇正統記

を代表したるものなり。

歴史には北畠親房の神皇正統記等あり。親房は南朝に仕へ、楠木新田の諸將が戦死の後は、ひとり王事に勵みて、國家の柱石たりしが、軍旅の間にも筆硯を捨てず。正統記は、著者が國事を慷慨して、古來の歴史を述べ、皇統の正閏を論じたるものにして、文章は平直に、議論は正大なり。

太平記等

源平の争鬪ありて、源平盛衰記等の作ありき、南北の戦亂ありて、こゝに太平記の長篇を見る。太平記は即ちこの戦亂の始末を記し、文體盛衰記より出でて、一層雄大にして、絢爛なるが、やゝ華に過ぐる嫌なきにあらず。その後、軍記の類にして見るに足るべきは、曾我物語、義經記等にして、次期にわたりての作なるべし。これらの軍記または傳記は、いづれも虚實相半したるものなることを忘るべからず。

三 室町時代

二〇五〇頃より二一五〇頃まで。

應仁の亂—兼良

桃花坊
將軍根源
連飛
新玉集
推談治學
丸島治學

將軍家の遊樂

室町幕府の世は、戦亂相繼ぎて、殆ど寧日なく、應仁の亂起りては、京師も修羅の巷となり、上下その堵に安んずること能はず。禪閣一條兼良名門に生れて、官位顯達し、博覽強記にして、殊に有職の道に委しく、その時の將軍等の爲に、政道を論ぜしこともありしが、亂を九條に避け、奈良に移り、また美濃に遊ぶ。京師の第内にありて、藏書の富を以て名ありしその文庫は、兵火を免れしかど、兵士に毀たれ、幾百合の典籍も、衢にとり散らされて、誰收むるものなかりきとぞ。この一事を以ても、いかに世態の悲惨にして、文學の榮ゆべき餘裕の存せざりしかを推すべし。

されど應仁の亂までは、幕威なほ地に墜ちず、殊に將軍義滿

能樂と謠曲

は勢強くして、遊樂を好み、義政はかの亂にあへりといへども、社會の辛酸も知らざるが如く、東山の閑居に文雅風流を樂めり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしも、この時にして、能樂の勃興に伴ひて、文學には謠曲を出したり。能樂は委しくは猿樂サルガクの能といふ。昔より神事に用ひたる技樂なりしが、義滿殊にこれを好み、樂師をしてその他の舞樂をも融和せしめて、今日も行はるゝところの能樂を起し、これに合せんが爲に、新曲を作らしむ、この新曲は即ち謠曲ウタ（うたひ）なり。これよりさき禪宗の行はれしより、僧侶の支那に渡航して、宋元の文化を傳へしこと少からず、義滿新たに明と交を修して、海外の交通や、繁し。謠曲の文は、蓋し當時の僧侶の手になりたるもの多かるべく、結構は元の戯曲に出て、また至るところ佛教の思想を含む。趣向は、幽靈顯はれて

狂言

（狂言）
カキコト
カキコト
カキコト

往事を語り、高僧の回向によりて成佛すといふもの、多數を占め、詞句は、好んで古文辭を補綴すれども、よく諧和して、珠を轉ばす如き好調に富む。これより能樂流行して、武家の式樂の如くなり、新曲續いて出でしかど、千篇一律の嫌を免れざりき。

能樂の餘興として、その間に挟み行ふものに、狂言あり。その技、能樂の嚴正なるに對して、滑稽を旨とし、よく人の頤を解かしめて、あかも往々世情を諷刺したるところあり。その文は當時の言語をそのままに寫して、率直愛すべし。

謠曲八島の一節

また修羅道の関の聲、矢さけびの音、震動せり。今日の修羅の敵は誰ぞ、なに能登、守教經とや、あらものくしや、手なみは知りぬ。思ひぞ出づる壇の浦の、その船軍今はや、閻浮に歸る生死の、海山一同に震動して、船よりは関の聲、陸には波の楯、月にまらむは、劔の光、潮に映るは、甲の星の影、水や空

ゆくもまた雲の波の、うち合ひさしちがふる船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて、かたきと見えしは群れゐる鷗、関の聲と聞えしは浦風なりけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐とぞなりにける。

和歌集勅撰の
断絶—歌道傳

和歌は日に／＼衰ふ。京極、二條兩家ともに既に絶え、歌集の勅撰は、この期の上半に一度行はれしかど、そののち世の亂るゝに伴ひて、古今集以來連續したりし事業も、遂に絶えたり。かくて歌道に志すものも、これを墨守して失はざらんことを恐るゝのみ。應仁の頃、東下野守常縁といふ武士、歌學に祕事傳授といふことを立てて、殊に古今傳授を重しとし、これを僧宗祇に傳ふ。その傳授も概ね何のいはれもなきことにて、今日より當時の無識を思へば、歎息の外はあらず。

連歌の流行—
宗祇等

この頃、和歌に代りて大に行はれたるは、連歌なり。連歌とは、短歌一首の半を一人がよめば、他の一人がこれに繼いでそ

和歌集

三鳥

いびき鳥

いたる鳥

る鳥

三木

柏木

わかむの鳥

わかむの鳥

わかむの鳥

わかむの鳥

わかむの鳥

の半をよむものにて、もと一種の遊技に過ぎず。その起源は太古にありき。後鳥羽天皇の頃より、わけて和歌の餘興としてこれをもてはやし、一首のよみきりに止まらず、首尾相繼いで、二十句以上、千句にも及びたりき。南北朝に二條良基これを好みて、その式を定め、また勅撰に准じて、菟玖波集を撰したりき。蓋し連歌の技たる、深く精力を費やすものにあらず。干戈匆忙の際も、半日の閑を樂むに適すれば、ます／＼世に行はれ、應仁の頃、僧宗祇に至りて絶頂に達す。宗祇旅行を好みて、詩才を養ひ、四方に流浪して定居なし。嘗て勅を奉じて、新撰筑波集を撰す。海内風靡して、斯道の宗と仰ぐ。門人に僧宗長、牡丹花宵柏最も名ありき。

水無瀬三吟百韻のうち (連歌)

雪ながら山もとかすむゆふべかな

宗祇

ゆく水とほく梅にほふ里、
 河風にひとむら柳春みえて、
 舟さす音もゑるきあけがた、
 月やなほきりわたる夜に残るらん、
 霜おく野はら秋はくれけり、

肖柏 宗長
 肖柏 宗祇
 宗長

四 戦国時代

二一五〇頃より二二六〇頃まで

戦国時代の衰運

應仁以來、戦亂相繼ぎ、皇室は窮乏の極に達して、節會大禮も行はれず、宮垣壞れて、遙かに禁中の燈を望むべく、供御足らずして、畏くも宸筆を錢に替へたまふ。幕府の威權全く地に墜ち、諸侯はその領地に割據して、奪略を事とし、京都は修羅の巷となりて、たゞ荒れに荒れ、貴賤ともに四方に離散す。かかる時、文學が衰微の極に達したることは、多言するを要せ

漢文學と五山の僧侶

ず。たゞ細川氏、三好氏の堺に、大内氏の山口に、北條氏の小田原に居りて、勢を振ふや、文藝に長けたるものの、一時遁れて、これらの地に住めることもありき。

鎌倉時代以來、漢文學は微々として振はず、僅かに僧侶の文筆に通ずるあり、禪僧は時に支那に行きて、學をかの國に受けたりき。戦國の世に及びては、衰運いよく、著しく、當時、博學の稱ありし公卿も、論語は讀めども、孟子は知らず、その他は推して知るべし。これらの間に立ちて、漢文學の命脈を保てるは、禪僧にして、殊に京都の五山はその淵叢なりき。

和歌、國文、及び連歌

和歌、國文の衰へたることもまた甚だしく、貴族には内大臣三條西實隆が、歌學を宗祇に受けて、その子孫に傳へたるなどのことあるに過ぎず。連歌はさすがに無學のものも作ることを得れば、盛に行はれて、武人が戰場消閑の技にさへ用

平民文學の曙光

ひられたり。
 文運かくの如く慘澹たる世なれども、都鄙の懸隔減じ、貴賤の階級壞れたれば、京師の貴族等が文學を獨占したる風も、共に失はる。武人に和歌をよくするものあり、和歌よりも連歌の行はれたるなど、いづれもこの傾向を示せるなり。されば江戸幕府の世に盛なる平民文學の曙光も、既にこの時に現はる。御伽草紙とて、童蒙の訓誨に資すべき小説の類は、この頃の作多かるべく、淨瑠璃即ち戯曲の起源もこゝにあり。山崎宗鑑、荒木田守武が好んで連歌の俳諧體を詠じ、卑俗滑稽を旨としたるは、俳諧のはじめにして、連歌の一句十七字を全詩として詠ずることも、またこの時代に起れり。

第四章 江戸幕府の世

文學の普及

江戸幕府の世は、泰平うち續きて、殆ど兵器の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。ひとりこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり。學問藝術上下に弘通して、四民ともにその徳を享け、文學の滋味も普く世に味はるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに従ひて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戯曲小説の類を愛し、彼は古文を墨守して、固陋に流れ、此は新作に傾倒して、卑俗に陷る。學識あるものは、新興の文學を卑み、新興の文學に就くものは、みづから低うして、高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲小説の如きは、戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得る

文學の階級

儒教の勢力

こと能はざりき。
 この時代に著しき思想界の現象は、儒教が佛教に代りて勢力を得たることなり。佛教の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、寺院には領地あり、檀那ありて、富有なるがまゝに、僧侶は漸く安逸に馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身治國平天下の道を唱へしかば、世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛にあらずして儒なり。されど從來養ひ得たる佛教の感化も、また侮るべからず。國學の新たに起りて、わが國本來の道を明めんと志たることも、また注意すべし。
 殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり。武士道は日本固有の廉潔尙武の精神に、人倫五常の別を明かにする儒教の意と、生死を離れ、進んで惑はざる佛教の旨とを折衷

武士道の勢力

時代物の流行

し、これを古來の戦亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて最も光彩を發揮し、武士はこれを以て造次にも忘るべからざる大道とす。その朴直を守りて、浮華を斥け、感情を卑みて、義理を重んじ、婦人の勢力を無視するは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重するより、時に殺伐に流るゝ弊なきにもあらざりき。
 幕府は干渉を嚴にして、漫に時事を説くを許さざりしかば、この時代の文學は、題を古に求むる傾向を現はして、いはゆる時代物の出づること多し。されど王朝はあまりに古く、制度風俗もいたく違ひたれば、これを喜ばず、鎌倉、室町の世、殊に鎌倉時代を、武士道の成立せし理想的時代と仰ぎて、好んでその折の勇武なる事實を文學の材料とす。わけて源義經の一生、曾我兄弟の復讐の如きは、最もよく邦人の武士的觀

念に適合せるものにして、既に室町時代より多くの文學的著作の材料となり、この時代に至りて更に夥しかりき。

一 寛永時代

二二六〇頃より二三四〇頃まで

文學復興の趨向

徳川家康國內を一統して、四民はじめて泰平の化に浴す。家康性極めて慎重、馬上に天下を得たりといへども、馬上にこれを治むべからざるを知りて、文學の興隆に志す。命じて散亂せる書籍を集め、必要なるは活字を製して、版行せしむ。世既に靜謐に、またこの奨励あり、寛永の頃に至りては、衰廢せし文學も、漸く復興の運に向へり。

儒教の勃興
惺窩、羅山

文學復興の魁たりしは漢學なり。されど久しくうち續きし戰亂の後を受けては、いまだ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて、社會の秩序を回復せんとし

五山

天龍
中興
連仁
車福
萬壽

たり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩、林羅山とす。惺窩は冷泉家に出でて、定家の裔なり。はじめ佛門に入りて、才名五山の間、高かりしが、中頃、儒教に志して、緇流を脱す。家康の京都にあるや、あはく延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才を擇んで、羅山を薦む。羅山は家康の聘に應じて、江戸に來り、律令制度の改定に參與して大功あり。これより子孫代々、儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱學は既に南北朝の頃よりわが國に傳はりしが、惺窩、羅山等の出でてより、大に世に行はるゝに至れるなり。

藤樹、闇齋等

朱學の外に陽明學も行はる。近江の人中江藤樹明の王陽明の學説を奉じて、實踐躬行を勵み、好んで孝經を講ず。近隣その徳に服して、みな善に移れりといふ。熊澤蕃山その門より

出て、備前侯に仕へて治績あり。儒教かくの如く行はれて、その社會における感化は、今や佛教の及ぶべきにあらず。神道には、從來、佛教思想を以て説をなし、もの漸く衰へ、山崎闇齋が朱學の説によつて垂加神道を立てて、世に用ひられしが如き、よく儒佛二教が勢力の消長を示せり。

亂世に當りて、歌道を將に滅びんとするに支へて、この時代に殘ししは、細川幽齋なり。幽齋は武人にして、諸藝に通じ、三條西家より古今傳授を受けて、大に世に重んぜらる。歌道を幽齋に學びたるもの、公卿に中院通勝、烏丸光廣、地下に松永貞徳等あり。されどいづれも古來の弊風を墨守せるに過ぎず。ひとり貞徳が和歌をも連歌をも措いて、力を俳諧に専らし、これを中流以下の人に弘めたる功を多とすべし。

貞徳と宗因

和歌における幽齋等

松永貞徳は京の人、御傘を著はして、俳諧の式を定め、これを

連歌より獨立せしむ。門人頗る多く、江戸幕府の世に、俳諧の興りて、連歌の廢れしは、實に貞徳の唱道によれり。されどその作甚だ幼稚に、また連歌の格を出でて、更に己が立てたる法に束縛せらる。この一派を古風と稱す。ついで西山宗因大阪に起りて、舊格を打破し、好んで世諺、漢語、字あまり等を用ひて、放縱なる一體を創む。これを檀林風といひて、また一時大に行はれたり。

玄をる、は何かあんずの花の色。
雪月花、一度に見するうつぎかな。
世の中や、蝶々とまれかくもあれ。
まら露や、無分別なるおきどころ。

貞徳 同 宗因 同

概するに、この時代は、文學復興の運に向へりといふまでに、いまだ斬新なる著作の春花秋葉と色を争ふに至らず。新作の書も、多くは訓蒙諺解の類なり。小説の類も、假名草紙と

訓蒙平易なる文學

いひて、御伽草紙より僅かに一步を進めたるものの、訓誨を旨とせるが多し。これらの作者には佛門の人少からず、民間には、佛教の勢力のなほ儒教よりも大なるを見る。

二 元祿時代

二三四〇頃より二四〇〇頃まで。

泰平年久しく、貴賤ともに慘澹たりし父祖の世を忘れて、食に飽き、衣は暖かに、安樂なる生活を送れば、更に新たなる文藝の行はれんことを望むや切なり。この需要に應じて、種々の文學大に興り、こゝに元祿時代の盛運は來れり。蓋し中古以來の文學は、その思想、用語共に舊習に縛せられて、狭小なる局面に逡巡するのみなりしに、始めて先例の桎梏を脱し、廣く森羅萬象に應接して、自在に事物を研究し、感想を述ぶるに至れること、これこの盛時の賜なりき。

元祿時代の盛運
文學の自由なる態度

往川、仁齋、祖來等

儒者の輩出
順庵、仁齋、祖來等

將軍綱吉漢學を好み、あはく儒者を集めて、經義を討論せしめ、またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には、羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に雨森芳洲、新井白石、室鳩巢、祇園南海等著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にして、よく父の學を祖述す。荻生徂來江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて、古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙す。その門人のうち、太宰春臺は經義に通じ、服部南郭は詩文をよくせり。

益軒と白石

筑前の土貝原益軒も當時の碩學なり。性謙讓にして、博識を衒はず、書を著はすや、概ね平易にして、實益あらんことを期

文學における
光圀

し、普通文に記して、丁寧懇切なり。江戸の新井白石は將軍家
宣及び家繼に仕へて、政務に參與す。學博く識高く、わが國の
歴史、制度、語學等に關して、有益の著多く、行文犀利にして、透
徹せざるところなし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。
この時代において、和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川
光圀とす。光圀は家康の孫なり、明の遺臣朱舜水を聘して、學
を講ぜしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに
集めて大日本史を撰せしむ。扶桑拾葉集、禮儀類典等も、光圀
が臣下を督して編せしめたるものなり。その學の重んずる
ところ、大義名分を正すにありき。

國文學における
保守派と革
新派

國文學の面目を一新せしことは、漢學にも超えたり。北村季
吟京に出でて、松永貞徳に學び、のち幕府に聘せられて、江戸
に下り、これより代々、歌學所を掌る。季吟の著はすところ、源

長流と契沖

氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄等甚だ多く、いづれも懇ろに古
文を註釋して、初學に便を與へたりといへども、從來の學風
を保守して、その外に出でず。その守舊なるに對して、革新の
旗を翻ししもの、江戸に戸田茂睡あり。梨本集ナシホを著はして、歌
道の積弊を論じたるが、いまだ大なる影響を見ず。國文學開
拓の主功は、實に釋契沖にあり。

光圀古典の研究に志あり、殊に古來、萬葉集が模糊の間にあ
るを遺憾として、その註釋を計る。時に大阪に下河邊長流カノヘノナガハシあ
り、古文に通じ、中古以來の僻説を捨てて、先人未發の見を立
つ。光圀の依託を受けて、かの註釋に従事せしが、終らずして
歿し、釋契沖その業を繼ぐ。契沖は眞言宗の僧にして、教學の
傍、國文學を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。その著述少
からざるが中に、學界に大影響を與へしは、萬葉代匠記と和

春満の國學

字正濫抄となり。代匠記は即ち光圀の囑に應ぜしものにして、偉大なる奈良文學はこゝにはじめて闡明せられたり。正濫抄は、中古以來、假名遣の誤れるを正せる書なり。やゝ下りて享保の頃、京に荷田春満あり。深く國史律令に通じ、從來、國書を解し、神道を説くものの、佛教かさなくば儒教の意を迎合せるを非とし、その本來の古意を明らむるを以て、己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて、國體のあるところを學ぶは、この人に起れるなり。幕末の際、勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化、與りて力ありき。學問の方面における文學の發達は、凡そかくの如くなるが、純文學の進歩は更に著し。俳諧には、伊賀の人松尾桃青芭蕉翁京に出でて、北村季吟に學び、のち江戸に來りて、正風を起し、また東西に周遊して、吟腸を養ひ、その風を擴む。蓋し舊來

桃青とその門流

の俳諧は、宗因に至りて、頗る自在なる域に進めりといへども、内容はなほ陳套にして、多くは措辭の上に幼稚なる滑稽を弄するに過ぎざりき。桃青起るに及びて、その地位を高くし、造化の祕を發くを以て歸趣とす。詠ずるところ、人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして、廣く雅俗にわたる。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多く、江戸には榎本其角の豪放なる、服部嵐雪の溫雅なるあり、他の地方には、向井去來、森川許六、東花坊支考等、いづれも一方の重鎮たりしが、師歿して後は、各その好むところによりて説を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。

ふる池や蛙とびこむ水のおと。

荒海や佐渡によこたふ天の河。

枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮。

桃青

同

同

聲かれて猿の齒しろし、峯の月、
梅一輪、一輪ほどのあたゝかさ。

其角
嵐雪

大阪の風俗

戯曲小説はなほさらに急速なる進歩をなしたるが、その作
多くは大阪に出づ。この地は商賈の占むるところにして、儒
教及び武士道の制裁も薄ければ、その文學もおのづから趣
味低くして、輕佻浮華の風を帯びたり。小説は井原西鶴出で、
假名草紙の幼稚なりしを轉じて、巧に世間の風俗を寫す、こ
れを浮世草紙と稱す。西鶴は大阪の人、西山宗因に學んで、俳
諧に長ぜしが、才の向ふところ、移りて筆を小説に染む。文章
輕妙奇抜にして、法格に拘はらず、社會の裏面を描き出して、
細微を極む。その作多くは短篇を集めたるものなり。ついで
享保の頃、京の書賈に八文字屋自笑あり、江島其磧と力を合
せ、西鶴に倣ひて小説を作る。これを八文字屋本と稱して、一

西鶴の浮世草
紙と八文字屋
本

戯曲の全盛
門左衛門、出
雲、半二

時また世に行はれたり。

戯曲は、謡曲等より出で、江戸幕府創立以前より既に行はれ
しかど、なほ拙劣なるものなりしが、この時代に至りて隆盛
を極む。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移
り、盛に戯曲を作る。寫すところ人情の祕奥を穿ちて、才藻湧
くが如く、行筆の自在なること、行雲流水に似たり。その作百
種の外に出で、時代物の數遙かに世話物より多けれども、識
者の稱美するは、寧ろ後者にあり。ついで竹田出雲あり、文才
は門左衛門に及ばずといへども、趣向の變化に富めること
は却つて勝り、今日もなほ行はるゝは、その作に多し。次期に
至りて、戯曲は衰へ、近松半二などその振興に力めしかども、
大勢を挽回すること能はざりき。

曾我會稽山の一節

門左衛門

ひつたてんとする所に、五郎時致何としてか見つけけん、坂を下りに駆け
 來り、列卒の兵五六人、ひつつかんで手鞠の如くうちつけ、團三郎が繩
 も皮もひきちぎり、八幡四郎をはたと蹴倒し、どうとふまへ、梢もゆるぐ大
 音にて、鹿の皮かづきし人を鹿と見るは、おろかの眼力、曾我五郎時致は形
 は人にて魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ、十郎殿、おりあひたまへ」とよば
 れば、祐成つゝいて走りつき、兄弟揃うて珍しき對面と、太刀の柄に手を
 かくれば、祐經が郎黨主をうたすな、餘すなと、二重三重にかけへだて、ひつ
 つ、んで、たち騒ぐ團三郎割つて入り、ア、く、且那、倉忽なされな、今日の
 お命團三郎が預かる、御一生の大事の御使、古郷の御老母、一昨日の夕暮よ
 りにはかの御病氣次第に重り、唯今も測られず、千に一つも御本復あるまじ
 き御覺悟、今生の名殘、兄弟に一目對面せん、萬事をふりすて、たち歸れ、これ
 に背かば、時致はもとの如く、十郎もろとも生々世々の勘當と、たえく弱
 る御聲を聞きすて、駈けつけしと聞くよりはつと力も落ち、兄弟目と目
 を見合せて、寝ぬに夢みるこゝちなり、ア、御思案どころでなし、京の小四
 郎の不所存人さへ、ひつ添うて看病、この人にお二人が孝行劣りたまひて

は、冥途までの御恨、天の冥加も恐ろし、祐經殿に和を乞うて、おたちく
 と勸むれば、祐經おほきに力を得、これく兄弟、父の河津は流矢に中りし
 とも、俣野五郎が討ちたりとも、分明ならぬ親の敵さしあてて、祐經を狙ふ
 となよし、く、さもしげにいひわけはすまじいぞ、サア、うちかけよ、きりか
 けよ、音にきく程にもなし、怯れたか、曾我殿原と足もと見たる廣言、五郎た
 まらず、神妙候ふ、祐經と踊りいづるをおしと、め、母の便を何とき、狂亂
 か、弟、いやく、微塵こつばいになればとて、敵に聲をかけられ、すく
 たつては骸の耻辱、放されよ、十郎殿、ヤイ身の譽も耻もすて、娑婆と冥土の
 父母を喜ばせ奉らんと、幼少より今日まで、兄弟が念願、はや忘れしか、時致
 「ハッアさうぢや、エ、殘念至極、くちをしい、祐成殿、無念な時致、あさましき
 曾我の運命や」と涙の齒ぎり身をふるはし、握りひしぐ太刀の柄、ぬきかけ
 ぬきかけはつし、と鏑打は、銅切羽も一時に、碎けちるべう見えてけり。
 ……母のいたはり心ならず、參會は重ねて、立たんすれば、暫く、
 孝行のほど感じいる、祐經も一家の端外のやうには思はず、本海道は遠け
 れば、山路の近道いそぎのため、某が祕藏の名馬、狩場まで引かせしを、兄弟

に餓別せん。外道鶴毛、婆羅門栗毛、これへく「あつ」と答へて引きいだす。その長八寸あまり、肉十分に節高く、沛艾に口こはく、乗入もせぬ野鬚の馬、一様の鞍皆具、遣繩、追繩、口取繩、つらを振れば、六人の舍人もよろめきひつたてられ、前脚かいて齒をたき、人を嚇して鼻嵐、鬣よりもる、眼の光角なき鬼の如くなり。兄弟きつと目くはせし、必定この馬に駈け落させ、殺すか、不具か、耻か、せん謀辭退せばなほ耻辱と、……ひるむところを引きよせ、ひらりとうちをつて、兄弟鑑ふんばつて、銜を並べひかゆれば、祐經案に相違して、唯うつかりと大口をあきれば、てぞ見えにける。祐成勇めば時致きはひ、チャア、團三郎、汝はこれより秩父殿、和田殿、そのほかの方々へ一禮申して、假屋をえまへ。サア來い、五郎、いざござれ、十郎殿と一鞭くれてのり出すも、日脚も速き午未、わが身の運も上刻と、八卦うらかた八響、鐘にさそはれ風さそふ、朽木の櫻春すぎて、また何時の世の花をだに、待つにかひなき曾我の里、いたはしや母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年の物おもひ、貧しき上に世をしのぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らず、身につもる、雪をれ松のむすをれに、にはか病の萬死の床、

たのしみは似ぬ孫晨が、藁屋の紙帳もりくる風、そよと寝がへり息つきも、今を限ときこえけり。

三 寶曆前後

二四〇〇頃より二四五〇頃まで

文運東遷の時期

幕府の創立と共に、政權は江戸に移りしが、人文の發達は直ちにこれに伴はず。京都は永遠なる歴史を有して、なほ文化の中心となり、大阪は西國往來の要津にして、豊臣秀吉がここに城を築きしより、次第に殷賑に、江戸にも著名の文學者はありしが、なほ少數にして、概するに前期までは、文學殊に純文學の中心は、京阪にありき。よかるに形勢は漸く移り、この時代は即ち文運東遷の過渡にして、次期に及びては、榮枯處をかへ、京阪は全く江戸に及ばざるに至れり。

在滿と眞淵

文運東遷の媒となりしは、荷田在滿、賀茂眞淵を主とす。在滿

俳諧の革新
蕪村、也有

蕪村、
月夜集
後、
蕪村、
文集

當時の短歌の例
信濃なるすがの荒野にとふ鷺の翅もたわにふく嵐かな。 同
大堰川、月と花との朧夜に、ひとりかすまぬ浪のおとかな。 蘆庵
霧わけてわがのる駒のたつ髪に、月こそ宿れ露やおくらん。 同

俳諧は都鄙にわたりて廣く行はるゝにつけて、宗匠は時好に投じ、風調甚だ卑俗に流る。天明の頃、この墮落を慨して、その道の革新を唱ふるもの、東西に起れるが中に、京の谷口蕪村を最とす。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を交へ、またよく歴史的事實を材料とす。桃青と相竝んで、斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。かくて次期に及びても、俳諧は遍く行はれしが、眞の伎倆ある人少く、その道漸次俗了しゆくのみなりき。
春の海ひねもすのたりくかな。 蕪村
ほと、ぎす、平安城をすぢかひに。 同

東西の小説の
消長

秋成、凌岱、鳩
溪

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。

戯曲小説は、京阪の間にも、その作なきにあらざれども、見るべきもの少く、次期に及びてはますます衰ふ。志かるに江戸にては、青本といふ小説この頃漸く發達し、兒童の玩具より進んで、世態人情を穿つに至れり。されど文學史上の價值より見れば、數多き青本の作よりも、寧ろ上田秋成、建部凌岱を重んずべし。二人はいづれも國文學の智識を基礎とし、漢文學をも折衷して、小説を作る。秋成は京阪に放浪して、文筆最も奇拔に、凌岱は江戸に住み、好んで古風の文を用ふ。平賀鳩溪も江戸にあり、奇才を抱いて世に容れられず、戯曲戯文を綴りて悶を遣りたりき。

四 文化文政時代

二四五〇頃より二五三〇頃まで

文學に於ける
定信

集古十種
興津園考
古子草紙
心草紙

元祿は京阪の文華の燦爛たる時代にして、文化、文政は江戸の最も光彩ある時代なり。文學に大功ある人、彼に徳川光圀があるが如く、此に松平定信あり。定信は徳川宗武の子にして、出でて奥州白河の城主たりしが、將軍家齊立つに及びて、老中となり、のち致仕して樂翁と號し、文學を樂みて晩年を送る。その政を執るや、力めて風紀の振肅を計り、道德的觀念を以て、學問文學を律したり。

學派の争と異
學の禁

三ツトウ

儒教においては、林家代々、幕府に仕へて、朱學を立つ。これに反して、さきに古學、古文辭學起りしが、その後、井上金峨、山本北山、大田錦城等また折衷學を唱へ、黨を分ちて相争ふ。定信その風教に害あらんことを患へ、林家の私學を幕府の有として、昌平校と稱し、林述齋をしてこれを統へ、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲をして助けしむ。また朱學を奉ぜざるものは、

東西の文學に
おける傾向の
相違

官職に就くことを得ざらしむ、これを異學の禁といふ。されどこの禁は學問に階級を立てて、研究の道を狭くし、學者が獨立自由の精神を滅殺する傾向ありき。

そもこの時代の末は、外船の渡來より事起りて、人心安からざるに至れりといへども、寛政より文化、文政の頃までは、江戸の繁華絶頂に達し、市民は泰平の化に浴して撃壤鼓腹す。若かるに京都はこれに反して、皇室は幕府に壓せられ、攝關清華の家も貧しくす。こせば、國學の開けて王朝の状態を知るにつけても、當今の非運を慨せざるを得ず。この形勢の相違はさながら文學に影響し、江戸の文學は泰平を謳歌して、不平の念の見ゆること稀なるに、關西には、頼山陽の如く、鬱勃の情禁じがたく、尊王愛國の主義を鼓吹するもの少からざりき。

眞淵の門流

宣長とその門
流—信友、篤
胤

賀茂眞淵起りてより、國文學の勢盛に、殆ど漢文學を壓す。その門人多きが中に、關西の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名ありて、その學風の異同はまた東西の形勢の相違を示せり。本居宣長は伊勢の人、紀州侯に仕ふ。その學一に古道を明むるにあり。古道を知るには、古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十五年を歴て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを知るべく、實に契沖の萬葉代匠記と併せて、江戸時代國文學界の二大作なり。宣長は多くの著述あり、殊に文法に通じて、詞の玉の緒等を著はす、和歌の作も多けれど、その長所にあらず。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子伴信友、平田篤胤最も著し。信友は小濱の藩士なり、博覽強記にして、敬神尊王の念篤く、考證に長じて、深く國史神典を究む。篤胤は出羽の人、江戸に

千蔭、春海等

圖書の蒐集と
訓話考證の學
—堀保己—

出でて、具さに辛苦を嘗めしが、志を挫かずして學を成す。その意、宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、これを弘布して儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説は、これらの論によりてますます、刺戟せられたり。加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人、遊樂を好み、歌文をよくすれども、學問は宣長の博きに比すべくもあらず。千蔭は萬葉集略解の著を以て著はれ、春海は漢文に通じ、よく和漢の文を折衷して、文豪の名あり。この二人が詠ずるところの和歌は、その師の如く萬葉の調にあらずして、寧ろ古今に則れり。その頃、橘守部また江戸にありて、國文學界に一家の説を立てたり。江戸は日本一の都會となりて、珍品奇什こゝに集まれば、書籍もまた求めやすし。されば生活の豊かなるに安んじて、圖

大堰川かへらぬ水にかけみえて今年もさける山櫻かな。
埋火のほかには心はなけれども、むかへば見ゆる「白鳥の山」

景樹 同

狂歌の例

時鳥なきつる跡に、あきれたる後徳大寺のありあけの顔。

赤良

歌よみは下手こそよけれ、天地の動き出してたまるものは、

飯盛

あらそはぬ風の柳のいとこそ、勘忍袋ぬふべかりけれ。

真顔

江戸の小説
京傳、馬琴等
江戸に於ける小説の發達は甚だめざまし。その作者輩出せるが中に、山東京傳早く許多の作を出して、名聲一時に鳴る。曲亭馬琴次いで立ち、學問該博にして、文藻絢爛なり。椿説弓張月、里見八犬傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求めて、及ばざらんことを恐る。時に前期より享保の振肅も弛みて、世風漸く浮華侈奢に流れしかば、執政松平定信等これが矯正に力めて、文學の風

俗を壊り、時事に渉るものを制す。一時これが爲に罪を得るものあり、京傳もその數に漏れざりしが、ひとり馬琴は謹嚴にして高く居り、その小説も一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。その他の作者のうち、殊に滑稽に名を得たりしは、十返舎一九、式亭三馬なりき。

小文吾諷諫して高く舟水を論ず（里見八犬傳のうち）

引かれて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に兩戸おちなく開かせたり。當下、小文吾はまづ頭を回らして、彼此と見かへるに、樓上の東面には、僧一山が款印ある對牛彈琴といふ四大字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり。時は今、夏と秋との違あれども、犬田が爲には、こゝも亦望郷の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれど、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つくづくと見わたせば、天ははやあけし横雲の色紙めきたるに、筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は宛も水に臥せるが如く、彼方に

蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき如と満誓が、詠みたる歌は、玄ら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、西に歌るあり、葛西村落幾戸の烟、南に沖つあり、北に滅ゆるあり、鎌田、浮田、行徳の浦々、あれかとぞ思ふ、目も適に、登る旭をふる里の方とし見れば、翁さびし、父のうへ又親戚のこと、胸に湛へてながらふる、かひこそなけれ、劔刀、身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵より、數しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり、常武これを慰めて、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ、尺蠖の伸びんとする時、まづその身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし、あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり、又真帆あげて走るあり、繋ぎし船は走るべからず、走る船は留まりがたし、和殿が今の滞留も、只この理をもて悟るべし、これをわが上に譬へていはば、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて、又よく船を覆す、自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん、かの隣國なる敵の爲に滅ぼされんこと疑なし、某も亦千葉の一族、馬加光輝の姪なれば、代つて取るとも、誰か咎めん、されば享徳の例に倣うて、自胤に

馬加光輝
自胤

詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を當城の主にせばやと、思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず、和殿今よりわれを佐けて、事成る時は、葛西の半郡を宛て行ふべし、うけひかれんやと、小膝を進めて、また他事もなく、聶けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひがけもなき密議を談せらる、ものかな、某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん、貴所は只水と船との反覆を説きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや、いかにとなれば、水の船をうかむるは、經なり、その船を覆すは、變なり、苟しくも只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし、君臣禮あり、舟車に楫あり、君臣禮を失ふときは、舟車に楫を失ふが如し、一旦その利を得るといふとも、滅亡せんこと疑なし、その君を弑せしもの、誰かその久しきを保ちたる、希望くは非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはば、徳誼後世に芳流して、子孫餘慶を承くることあらん、某武藝を好めども、短才にして文學なし、いかでか人の佐となるべき、只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念ずるの外は候はずと、憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒

幕末の衰勢

は面に見はれても手を又きて物いはず。
 嘉永以後は、幕府勢を失ひて、列藩これに服せず、歐米諸國をきりに開港を迫り、志士諸國に奔走して、勤王の論と佐幕の説と相争ひ、世の中甚だ騒がしく、人心洶々たれば、文學は漸く衰微して見るに足るものなし。かゝる中に明治維新の世は來れり。

第五章 明治の世

二五三〇頃より。

文學における階級の破壊

明治の維新は未曾有の改革にして、社會のあらゆる事物は非常なる變化をなせり。その種々の變化のうち、まづ一世を聳動せしを、階級制度の破壊とす。職業の世襲は止み、四民は平等にして、たゞその才能によりて進めば、文學に於ける上下の區別も消失せざるを得ず。上流社會に根ざせる保守の

歐米文化の移殖

弊は失せて、前代には中流以下にのみ玩ばれし俳句、戯曲、小説の類も、遍く貴賤の間に行はれ、高尚なる文學の品位は始めて明かに認めらるゝに至れり。

維新の改革は歐米文化の移殖によりて成れり。太古以來、久しく儒佛二教の感化を受け、社會はこれが指導の下に立ち、進歩し來りしが、今や翻然として東西兩洋の優劣を知り、力めて優秀なる西洋の文化を學ぶ。かくてその文化の注ぎ入ること、高潮の漲り來るが如く、國民の思想は諸般の事物と共に、その影響を被りて、三四十年前には夢にだも想はざりし變化を遂げたり。

國民的特性の發揮

あかれども現今の文運の進歩は、決して外國の事物を移殖するのみによりて成れるにあらずして、その本づくところは、國民が己の能力を自覺し、發揮したるにあり。悠久なるわ

が歴史はその民の智能を育成して、深く蘊蓄するところあり、またよく物の本末を辨へ、漫然たる模倣の益なきを覺らしむ。かくしてわれらは國民的特性を基礎とし、外國の文化の長短を取捨して、これを彩り飾れるなり。

國民の自覺と外國文化の折衷とによりて、われらの思想は著しく進歩し、文學もこれに伴うて、形式と内容と共にまた大なる變化をなせり。内容の變化も固より見るべしといへども、形式の動くは、更に一步これに前だつ。國文學と西洋文學と併せて研究せられ、文字の改革を論ずるものあり、言文の一致を唱ふるものあり、新進氣鋭の士は從來の歌文の陳套なるに飽きて、新體を試みるもの多く、文壇は漸次隆昌の度を加ふるに至れり。

現代における文學の景况、凡そかくの如し。その進歩は、これ

文學の形式の改善

文學の現状とその前途

を維新以來の物質的文化の急激なる發展に比すれば、遅からざるにあらず。蓋し精神的事業は常に物質的事业の後に來る。新たに覺醒したる國民は、まづ衣食住の改善に忙はしく、工藝に勵み、交通を便にするなどのことに急にして、文學の進歩はやゝ緩やかなりきといへども、今や文物日に進み、人心に餘裕を生じて、國民は漸く高尚なる文學を享樂せんことを思ふ。かくしてわが帝國が東西兩洋の文學の二大潮流を融化し、光輝ある文學を以て、世界に雄視せんとする氣運は、正に迫れるなり。

250

文部省檢定濟

〔日月定檢〕

明治三十三年九月二十九日
中學校及師範學校

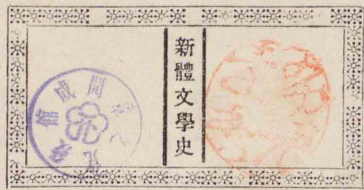
國語教科書

著作權所有

〔日月行發〕

明治三十三年七月十一日印刷
明治三十三年七月十五日發行
明治三十三年九月二十二日訂正再版印刷
明治三十三年九月三十日訂正再版發行

(定價四拾五錢)



發行所

大阪
大阪關成館
電話東局八〇七番
大阪市心齋橋通北久寶寺町角

發行所

東京
東京關成館
電話番町三五五番
東京市小石川區小日向水道町七十三番地

發賣者

三木佐助
大阪市北久寶寺町四丁目百六番屋敷

印刷者兼

西野虎吉
東京市小石川區小日向水道町七十三番地

著者

藤岡作太郎
東京市本郷區駒込西片町十番地

(株式會社東京築地活版製所印刷)

Kondo

新體日本文學史教科書終

Kondo

Kondo

